

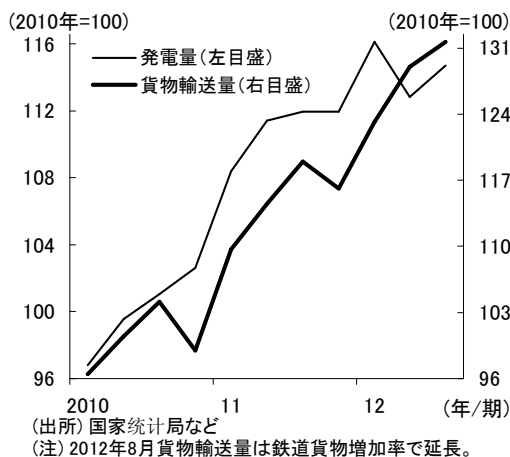


堅調な中国経済

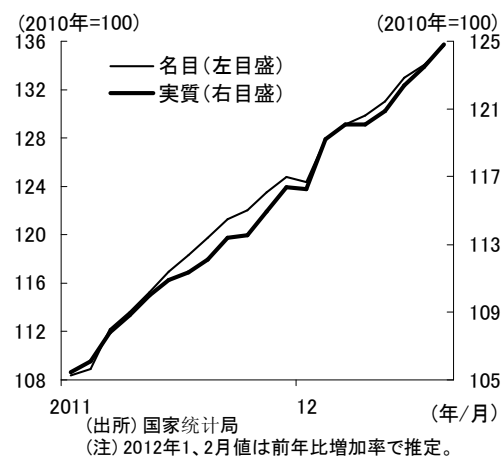
～ 新たな牽引役と成長センター ～

- (1) 中国に景気減速懸念。信頼性が高いとされる電力、貨物統計に季節調整を施してみると、まず発電量は、本年2月の閏年要因に伴う嵩上げを除くと、昨春から今春まで横這いで推移（図表1）。しかし6月を底に7月から力強い増勢回復。一方、貨物輸送量は昨年末には翳りが払がったものの、本年入り後、再び堅調な増勢。総じてみれば7月から景気は底堅さを増す展開。
- (2) 需要サイドからみると、海外経済が弱含み、このところの景気牽引役は内需。まず個人消費は、食料品を中心に昨春から消費者物価の騰勢が次第に強まるなか、昨秋にかけて増勢鈍化（図表2）。さらに今春には先行き不透明感の強まりを映じて消費者マインドが慎重化。しかし、物価の騰勢沈静化や良好な所得雇用環境のもと、6月から再び実質ベースで年率2桁の増勢に復帰。
- (3) 一方、固定資本投資は、本年6月大幅減に陥ったものの、7月から再び力強い増勢へ（図表3）。もっとも本年に入り従来と異なる動き。まず分野別にみると、これまで新幹線や高速道路などの土木工事や住宅建設を含め分野を問わずハイペースで増加。しかし、本年入り後、土木や住宅は頭打ちから弱含み。代わって機械投資、さらにオフィスビルや商業施設など非住宅建設が大幅増。産業の高付加価値化や経済のサービス化、消費主導型経済への転換など、近年の構造変化が反映。
- (4) さらにエリア別にみると、これまで同国経済を牽引してきた沿海部の寄与度が低下する一方、内陸部の寄与度が上昇（図表4）。具体的には江蘇省や山東省、広東省、浙江省の寄与度が低下。寄与度増加の第1位は遼寧省、次いで吉林省。黒龍江省を含め、東北エリアが躍進。それら以外では、交通インフラの整備によって省都南昌と湖北省武漢、湖南省長沙とのトライアングルが形成された江西省、西安を中心に物流・生産拠点化が進む陝西省が躍進。構造変化を通じて新たな牽引役や新たな成長センターが登場。同国経済が減速に陥る懸念小。

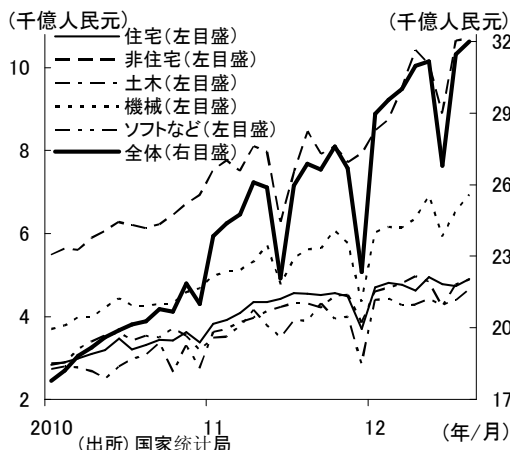
（図表1）中国の発電量と貨物輸送量（季調済）



（図表2）小売売上高（季調済）



（図表3）分野別固定資本投資（季調済）



（図表4）エリア別固定資本投資（前年比寄与度）

